



みどり

令和5年9月29日
調布市立緑ヶ丘小学校
校長 鳥居 圭

E-mail midorigaoka-sho@chofu-schools.jp

目指すは、児童一人一人の「エンジョイ・スタディング」

今年の秋の大会では、県予選で惜しくも桐光学園に敗退してしまった慶應義塾高校ですが、夏の全国高校野球選手権記念大会では、神奈川代表として慶應旋風を巻き起こし、ついに優勝したことは記憶に新しいことと思います。監督の森林貴彦氏は幼稚舎（小学部）の先生です。監督は「エンジョイ・ベースボール」を掲げ、野球の楽しさを味わわせたいと髪型を自由にし、選手が練習メニューを作ることや、生徒（捕手）と相談しながら投手交代のタイミングを決めるなど生徒の自主性を大切してきました。この方針は、学内では30年以上前から提唱されてきたとのこと。さらに、相手データを細かく分析する「データ班」も野球部員が担い、勝利に大きく貢献しました。他の多くの学校においてもデータ分析が進んでいることから、スポーツの世界でも「自ら考える姿勢や力」は必須であると感じます。では、森林先生は、監督として日々どのような仕事をされていたのでしょうか。生徒に任せきりで放任していたのでしょうか。決してそうではないはずです。

元プロ野球選手の内川聖一氏が「エンジョイ・ベースボール」についてコメントを求められた際、「私たちの学生の頃の部活は、監督に言われたことを一生懸命やっていただけだった。『考える野球』は、自分たちで考えなければならない分、難しいことでもある」と語っていました。つまり、「自由にやっていいよ」「自由にやらせてもらえる」というスタイルは、画一的な指導スタイルと比べて監督にとって、そしてもちろん生徒にとっても相当難しい、レベルの高い活動なのであるということが想像できるわけです。

さて、現在学校でも「自ら学ぶ姿勢」や「学習意欲」をととても大切にしています。授業の導入では、視覚的に驚きや感動のある教材を示したり、これまでの学習を結び付けて問題を見いだしたり、各自の使いやすい資料や道具で調べたり、グループでの話し合いや、多様な発表の機会を設けたりと工夫を講じています。これまでのように、最短距離で正答にたどり着く方法を教え込んだり、クラス全員をひとまとめにして正答に誘導したりするような授業スタイルは、今後さらに影を潜めていくことでしょう。現在の教育界の話題は「個別最適な学び」と「協働的な学び」です。児童一人一人が問題を見出し、自分なりに見通しをもち、自分なりに追究活動を行うような学習スタイル「個別最適な学び」、その結果を周囲と相互に交流し、考えを深めあっていくような「協働的な学び」、これらの充実への志向が強くなっています。中には「自由進度学習」といって、乱暴な言い方をすればその学習の取組を児童自身に任せよう、という考え方も出てきました。「学習は子供のもの」と言えば聞こえはいいですが、まかり間違えると「丸投げ」ということになりかねません。先生が、今日の課題だけ児童に伝え、「質問があれば来るように」と言って自分は自席で丸つけ、児童を放置といった姿だけは絶対に避けなければなりません。

大げさに言えば、今まで1通りの教え方でよかったものが、児童が30人いれば30通りの疑問、30通りの解決方法、30通りの結論に対応していく必要が出てくるかもしれません。一人一人の児童の学習状況をしっかりモニターしながら、適切なタイミングで、適切な内容を個別に指導、助言し、また継続的に寄り添い、支援を続ける、という、先生にとってはちょっと気の遠くなるような学習活動の展開が期待されるような時代が、もうすぐ来るのかもしれません。それまでにICTがもう少し便利に利活用できる環境などがそろうとよい

のですが。そしてそれらの試みが、児童一人一人の「エンジョイ・スタディング」に繋がれたらよいのですが。